

『東一南、投影と変質』

一点の作品は、完成するまでにいかなる過程を経るものだろうか。

そう問いかけてみると、学生の頃からの習慣として、「創造」という崇高で便利な言葉を、つい使ってみたくなる。しかし、全くの無からの「創造」ということはありえないし、「経験」や「過去」から何も負わない芸術は存在しない。

例えば作品を作ることは、作者の「経験」の何らかの『投影』であり、また「過去」から引き継いだものの何らかの『変質』である、と仮定してみよう。『投影』のためのスキルとして、版形式が選ばれることもあるだろうし、また、「過去」の作品が『変質』を被ったかたちで提示されることもあるだろう。

これらは特別な概念ではないけれど、現在の二人に共有できる言葉である。

『東一南』は、二人の活動する場所をごく単純に表している。

「経験」や「過去」との向き合い方は、二人の場所、位置に影響されることは言うまでもない。それは、「個性」とは、また別な意味を持って、二人の作品の差異を形づくる。

これらの共有できるものと、差異として見えてくるもの。作品を並べる企ては、それを眺めてみたい、という欲求からはじめられた。

2005年8月22日 石村 実・知花 均